

【第四回大会シンポジウム
神話と昔話―女性神をめぐる―】

シンポジウムの趣旨および報告

間宮 史子

世界経済フォーラムによる「ジェンダーギャップ指数二〇二二」において、日本が調査対象の一五六か国のうち一二〇位だったことは記憶に新しい。現代の日本社会に依然としてある男女格差、一方、人々が伝えてきた物語をみると、そこには「男女格差」を吹き飛ばすようなさまざまな女性の姿が語られている。

神話や昔話には、産みだす母神としての女性神のみでなく、さまざまな女性神があらわれる。このシンポジウムは、各文化圏の神話や昔話にあらわれる「女性神」「女性的なもの」の姿、機能、力について、また、それを人々はどのようにとらえてきたのかを、三名のパネリスト、北原モコットウナシ氏、沖田瑞穂氏、坂井弘紀氏に報告してもらい、各文化圏における「女性神」の特徴、共通点や相違点に迫りたいと企画したのである。今大会の三浦佑之氏の講演「出雲神話の女神たち」と渡邊浩司氏の講演「妖精モルガーヌと妖精メリユジーヌ―ケルトの女大神の化身たち―」もこのテーマに沿ったものであった。今号にご寄稿

くださった両氏の論文を是非ご一読いただきたい。ふたつの講演とこのシンポジウムを合わせ、日本、アイヌ、インド、中央ユーラシア、ヨーロッパの、神話や昔話の女性神がつながることをねらった。

ここでは、まず、北原氏と坂井氏の報告についてかいつまんで紹介し（詳細は両氏の論文を参照いただきたい）、残念ながらご寄稿が叶わなかった沖田氏の報告についてはやや詳しく紹介する。

北原モコットウナシ氏の報告「アイヌの火神はなぜ老婆なのか」によると、アイヌの祭神の多くは女神だといわれ、そのうち火神は特に重要な地位にあるという。紹介された伝承によると、火神は、飢饉のとき地の果ての沼で魚を取り国中に投げ与え、夫が水の女神にたぶらかされると水の女神と争い、また、ゴザ編みの最中に人間の女が危篤だという知らせがくると、墓場から魂を入手して蘇生させる。火神は能動的で、豊穣や生死と関わるのがわかる。一方で、北海道西部で女神とされている神格が、東部では夫婦の神とされているという。北原氏は、神の性別は確定的なものではなく、神の性別と祭祀上の慣習が結びつけられたのではないかと考え、「神話における女神像は、神話を必要とし、生み出してきた人々の要請に沿って変容した」という松村一男の説を引きつつ、アイヌの重要な祭神が女神であることも、祭祀者が男性であることによるのではないかとし

た。

坂井弘紀氏は「中央ユーラシアの女神・女戦士」において、テュルク系諸民族の神話・英雄叙事詩に登場する女神や女戦士を紹介した。アルタイ、カザフの神話における「最初の女」エジ、ハワはイヴにあたる。マニ教を通じたセム系神話の影響だと考えられるという。女神ウマイはテングリ（天空神）の妻とみなされ、天界の女フマイはバシユコルトの英雄叙事詩「ウラル・バトゥル」の主人公の妻で白鳥にもなる。カザフの伝承では、ウマイとフマイが鳥の姿で飛来し、人間に火をもたらす。ウズベクの英雄叙事詩「アイスルウ」でイランと戦うトゥラン国の女王アイスルウ、カラカルバクの英雄叙事詩「四〇人の乙女」で四〇人の乙女を率いて侵略者と戦う女戦士グライム、格好い戦う女性は主人公として語られている。坂井氏によると、騎馬遊牧民族は基本的に父系制ゆえ、女性が女王として君臨することははないというから、女王・女戦士は理想像として捉えられるという。

沖田瑞穂氏は「『マハーバーラタ』におけるマードヴァイーに見る少女と母の一体性について」と題して報告した。

ヤヤーテイ王の娘マードヴァイーは四人の男と次々に結婚して、彼らとの間に一人ずつ息子を儲ける。彼女は「四つの家系を確立させる者」であり、「子を生むたびに処女に戻る」という恩寵を授かっている。彼女の四人の息子の性質は、デユメジルによっても指摘されたように、三つの機能（主権、戦闘、生産）と関

連しており、マードヴァイーはその全員之母であることによって、汎機能的な存在であると考えられるという。さらに、マードヴァイーにはケルト神話の王権女神との共通点が認められるとし、女神が自ら王となる者を選択して王権を授ける話である、ダレ王のルギドという同じ名前の息子たちの話を示した。そこでは、王権は始め醜い老婆としてあらわれ、兄弟のうち一人が彼女と寝ることを承諾すると、美しい女に変身する。また、王権女神は鹿と関連するが、それはマードヴァイーにも認められるという。マードヴァイーは、ケルトの王権女神のように、王となる人物を選び王権を授けることはしないが、「四人の王」の嫡子を生むことによつて、四つの王権の存続を助けたといえる。

マードヴァイーの「少女・処女」と「母」を行き来する性質については、ギリシア神話のデメテルとコレ（ペルセポネ）の話と比較することで明らかにした。ハデスによつて冥界に連れ去られたペルセポネを母デメテルが取り戻すこの神話には、母と娘の一体性がみられ、母から娘、娘から母という循環性がある。「子を生むたびに処女に戻る」マードヴァイーにも少女と母の一体性がみられるという。沖田氏はさらに、このような少女と母が循環する神話的思考は現代にも引き継がれているとする。そして、宮崎駿のアニメーション作品『ハウルの動く城』を挙げ、少女と老女を行き来する主人公ソフィーに、マードヴァイーや、デメテルとコレにみられる「女性における時間の還流とその永続性」が再現されていることを指摘した。

全体討論では、このテーマの拡がりが見えたとはいえる。火と女性、灰と聖性、灰の豊穰性、乙女・処女は成人しているが未婚の女性つまり境界の女性、異界へ誘う女性、水辺に出現する女性、戦う女性、といった話の内部で語られる事項について、一方で、「女性神」の話を語るのは女性か、また、女性君主や女性戦士は現実存在したのか、現実の世界における女性の地位と「女性神」の話の関係は、といった話の外部の事項についてもさまざまな指摘や質問があった。

シンポジウムの司会を務めつつ、私はグリム童話二四番でも知られるドイツ語圏の「ホレさん」を考えていた。豊穰の女神、泉や井戸の女神、糸紡ぎをする女神、狩りの女神、生死の女神、と考えられたホレさんは、火とも関係があり、その姿には美しい女と醜い老婆という二面性が認められ、他文化圏の女神とつながる存在である。

「神話と昔話―女性神をめぐって―」というテーマでの講演とシンポジウムは、当初、二〇二〇年度の第四回大会のために計画された。ところが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、第四回大会は研究発表のみのウェブ大会となり、講演とシンポジウムは二〇二一年度の大会に延期された。その第四回大会は結局、ZOOMによるオンライン開催ということになったのだが、二年越しの講演とシンポジウムを無事実施することができた。また、オンラインにも関わらず、シンポジウムの全

体討議で多くの質問や意見が寄せられたことは良かったと思う。加えて、「第四五回大会サイト」のシンポジウムページに設けられた「コメント欄」には二〇を越える投稿があり、シンポジウムの終了後も質疑応答や意見交換がなされていた。

日本、アイヌ、インド、中央ユーラシア、ヨーロッパの、神話や昔話の「女性神」がつながることをねらった講演とシンポジウム。各登壇者の切り口は異なるものの、その目標にいくらかでも近づくことができ、さらに追究すべきテーマがみえてきたことは収穫だったといえよう。

(まみや・ふみこ／白百合女子大学)